

菅平生き物通信



発行者／筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所 〒386-2204長野県上田市菅平高原1278-294
☎0268-74-2002 FAX 0268-74-2016
http://www.msc.tsukuba.ac.jp/ ✉ikimono_srs@un.tsukuba.ac.jp 第83号 2021年(令和3年)2月14日(日)発行 ©菅平高原実験所

キジとヤマドリ〜足痕は3本指〜

筑波大学生命環境系

特命教授

町田 龍一郎

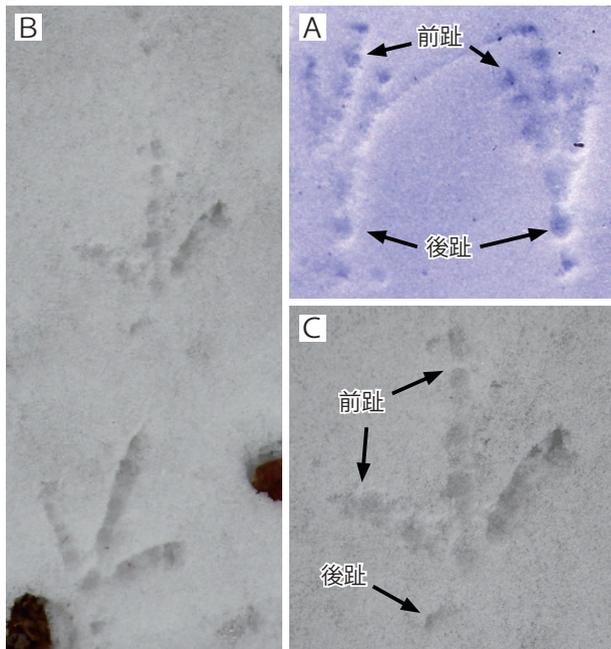


図1：鳥の足あと A：ハシブトガラスの足痕、B：ヤマドリの足跡、C：ヤマドリの足痕の拡大、長さ約8cm



図2：雪上を走る雄キジ(大)と、雌キジと雛(小)

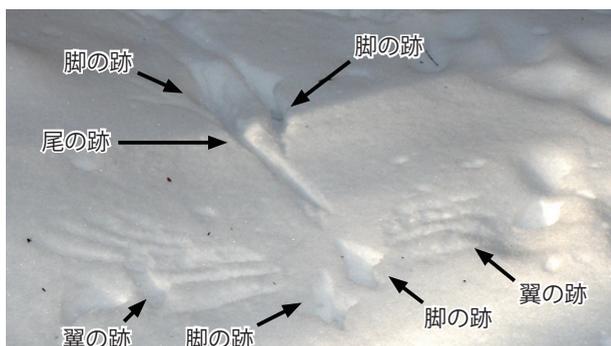


図3：雄キジが飛び立ったときに雪上に残した跡

アニマルトラッキング(雪上などの足跡(※1)や生活痕を観察し、動物の行動を調べること)をしていると、キジの仲間の足跡によく出会います。キジ科の鳥は飛ぶより歩き回ることが多いからでしょう。皆さんがよくご存知のように、普通の鳥では、前に3本の指(前趾)と後ろに1本の指(後趾)、つまり4本指の足跡です(図1A)。しかし、木の枝にとまることが少ないキジの仲間では後趾が短いため足跡にほとんど残らず、足痕は3本指にみえます(図1B、C)。私たちの周りで馴染み深いキジ科の鳥、キジとヤマドリのお話です。

河川敷、平坦な明るい林に好んで生息します。雌は尾が短く褐色の地味な姿ですが、雄は長い尾を含めて体長80cm内外、ご存知のように絢爛豪華で、縄張り宣言も派手です(図2)。「ケーン」と大声を上げて、両翼を激しく羽ばたかせブルルと大きな音を立てる「母衣打ち(※2)」。このように派手な縄張り宣言から「キジも鳴かすば撃たれまい」の成句が生まれました。「キジはこんな派手な縄張り宣言をしなければ、猟師が気づいて撃たれることもないだろうに」、転じて、「無用なことを言っただけにひどい目にあう」の意味合いです。

きのこに生えるカビ

筑波大学生物学学位プログラム
博士前期課程(1年) 前川直人

筑波大学生物学学位プログラムの前川直人と申します。今回は私が研究している菌類について紹介させていただきます。今回は私が研究している菌類について紹介させていただきます。

私はきのこに寄生するカビの研究をしています。森できのこを探していると、たまにカビが生えているものが見つかるかと思えます。それらのカビの中で、生きているきのこに寄生して栄養を得ているものを一般的に菌寄生菌と呼んでいます。このような寄生菌は多く存在するものの、どのようにして特定の宿主を選び寄生しているのか等の生態的なことについてはあまり分かっておらず、謎の多い存在です。

私は、去年の春から菅平できのこに寄生する菌を集め、その結果として7種ほどの菌寄生菌を見



図5：古いハナイグチ上の *Dicrophora fulva*



図6：晩秋の食菌として有名なハナイグチ

つけることができました。多くは菅平以外の低地でも見かける種でしたが、今回紹介するのは *Dicrophora fulva* (以下本菌、図5) という種は他の場所ではあまり見ることのできない高原ならではの種です。

本菌の宿主として多いのは、長野県ではジゴボウという名前前で秋の味覚として親しまれているハナイグチ(図6)であり、この菌も晩秋のカラマツ林で多く見つかります。ハナイグチを見つけたときに、黄色い毛のようなものが生えていればそれが本菌です。

野外で本菌が発生しているのは比較的古いハナイグチなのですが、菌自体は早い段階で入っているようで、きれいに見えるハナイグチでも2〜3日冷蔵庫に入れておくとこの菌が出てくることがあります。また、この時期の菅平のカラマツ林には、ハナイグチ以外にも多くの種類のきのこが発生しています。しかしながら本菌は、ハナイグチやその近縁の種からしか見つかっていません。

私は本菌のような種が、どうして他にも資源があるにも関わらず特定の種類のしか寄生しないのか、また、たくさん生えているきのこの中からどのようにして特定の種にたどり着き、どのタイミングで寄生しているのかということに興味を持っており、本菌を用いた実験でそれらの謎を明らかにしていきたいと考えています。



図4：雪上を歩く雄のヤマドリ

がはつきりと残っています。逃げるときには、このように飛ぶこともありますが、普通はとにかく走ります(図2)。そのスピードは凄くて、時速32kmという記録があります。

ヤマドリはキジと違って、湿気のある谷沿い、シダがあるような暗い針葉樹などの森林を好みます。例えば菅平高原では、その中心の平らなところはキジが、その周辺で谷になっているところは、菅平ダムの周りや十の原別荘地などにはヤマドリというように、しっかりと棲み分けています。体は金属光沢のある赤褐色、雄では尾を含めると優に1mを超え、抜群の存在感です。和歌(柿本人麻呂、「あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」)などで「長い」の序詞になるなど名前は有名ですが、藪や森に隠れた生活をしているのでなかなか出会うことのない鳥です。また、縄張り宣言では母衣打ちをしますが、声をあげることはないで、なおさらです。キジと同様、雌は尾が短く、体色は赤みが弱い褐色です。

※1 足跡：複数の足痕からなる、一連のあと／足痕：ひとつの足によってつけられたあと
※2 母衣：武士が矢避けの目的で背負った大きな袋。騎乗で疾走した際に母衣がバタバタと立てる大きな音と、キジの羽ばたく音とが似ているのでこのように呼ばれる

東京の空の下で想い続けた 菅平の風景

筑波大学山岳科学学位プログラム
博士前期課程（2年） 久保田 賢次

筑波大学山岳科学学位プログラムに在籍の久保田賢次と申します。登山やスキー関係の出版社を還暦退職したのを機に入学させてもらいました。空気も清々しい菅平で過ごす日々を楽しみにしていました。残念ながらこの1年は、その機会がほとんどありません。住まいが感染拡大も続く東京都内ですので、ご迷惑になってはいけないと、自宅近くで過ごす毎日でした。私はすぐそばを荒川が流れる東京北東部の足立区に40年近く暮らしています。再び頻繁に山



図7：富士山もこんなに大きく見えていたんだ…。サラリーマン時代、疲れて満員電車で揺られる日々には、こんな景色があることにも気がつかなかった

に出かけられるようになった時のために体力は保っておこうと、川岸をジョギングしながら感じたことがあります。放水路として人工的に開削されたこの川も、完成から90年の歴史を経て河原に木々も生い茂り、林のなかに居るような錯覚さえ抱かせてくれる所もあります。春には満開だった桜も、いつしか葉桜となり、例年と変わらずに飛来してくれた燕にも感謝しました。普段なら顧みることもない小さな草花の、清楚で可憐な造形に見入ることも。誰とも会わず話さず植物や鳥や風景と対話を続ける日々は、小学校に入る前、野原や田畑で一人、蝶やトンボやメダカたちと戯れていた頃に戻ったような心地よさすら感じさせてくれました。

冬の晴れた朝など真っ白な富士の姿に感銘を受けますが、連なるその他の山々にも愛おしさを感じました。荒川の源流は奥秩父方面ですが、土手の高いところから見える峰々を山座同定しながら、「あの連なりのさらに右手が浅間山や四阿山のほうかな」と、菅平のことも懐かしく回想したものです。

来春からは会社勤めに戻ります。山、川、海のつながりが理念である「山の日」の普及広報の仕事にも本腰を入れて携わる予定ですが、菅平で学んだ自然や生き物、人の素晴らしさも含

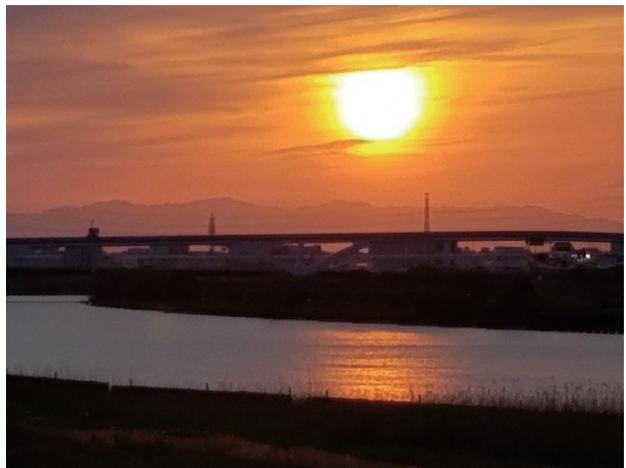


図8：荒川土手からの夕陽。この山並みの右端のほうは浅間山などの方角になる。雪の季節は上空が厚い雲に覆われ、菅平の大雪や寒風を想った

YouTube / 筑波大学 山岳科学センターチャンネル

八ヶ岳演習林、井川演習林、筑波実験林とともに、自然の様子などを発信しています。



筑波大 山岳科学 youtube

で検索

めて、「山の価値」をお伝えしていけたらと思っています。そうしたことに気づかせてくれた菅平の皆様、ほんとうにありがとうございました。

◆◆◆ 本通信の印刷・配布は 東郷堂様にご協力いただいております ◆◆◆

◆◆◆ 次号は4月発行予定です ◆◆◆